

「シンポジウム 日の出の森からのレッドカード／ 三多摩のごみ最終処分場問題からごみ解決を考える」

(2016・12・10～12・11 開催)に参加して、これからの中多摩ゴミ最終処分場問題について、考えてみた。

宮入 容子

◆日の出町（ゴミの受け入れ側）と三多摩（ゴミの搬入側）の関係

93年当時、谷戸沢処分場の汚水漏れと第二処分場建設計画が浮上し、三多摩市民を中心となって「自分たちの出すゴミは、自分たちの町で始末しよう」をコンセプトに「自区内処理を実現する市民プロジェクト」が発足した（現時点での市民団体は解散している）。日の出町にあるゴミ最終処分場に三多摩市民のゴミが運び込まれていることを、自分自身の問題として捉え、「ゴミの焼却・埋め立て」とは別のゴミ処分の解決策を模索していた。いま、振り返ってみても画期的な市民運動であった。さて、現在はどうだろう。三多摩では、日の出問題（運動）を知らない又は忘れてしまっているように思える。もしかしたら自分のゴミがどこに運ばれているかも知らない市民がいるかもしれない。

シンポジウム後、Nさんから「これからは地道ではありますが、三多摩に乗り込んで、日の出処分場と言わないで、日の出にあるあなた方の三多摩最終処分場、エコセメント化施設で大変なことが起きていますよ！と訴えていきたい」とのメール。それを読んで私もこの原稿のタイトルに書いた「日の出処分場問題」を消し、「三多摩ゴミ最終処分場問題」にしたのだった。

◆インターネットと若者

報道関係者が「今はインターネットがあるのすぐに発信できる。すぐ行動できるのが20歳代。これから契機になると期待できる」と話していたが、この話とつながることが会場で起きた。司会者Sさんの機転で「若い方の意見を」と、若い青年に振った。青年は「組合の広報紙には、いいことがいっぱい書いてある。さすがにこれはおかしいと、検索していたら、シンポジウムのことを知ったので、昨日、今日と出かけてきた。こういうのはネットで動画も氾濫しているが、情報が氾濫しすぎて何が正しいのかわからない。生(なま)の話を聞いたいと思ってきた。聞く内容に圧倒されている」と発言。

良くも悪くもネットである。特に組合のホームページや組合発行の「たまエコニュース」はエコセメントの有効性を宣伝し、谷戸沢処分場は今や「里山的自然環境」が創出されていて、フクロウやオオムラサキ、トウキョウサンショウウオなどが生息していると強調する。そんな情報を鵜呑みにせず、自分で確かめてみようと行動した青年。しかし、青年が言うように情報は氾濫する。Nさんが、10年ほど前に、今のマスコミには期待できないからインターネットを立ち上げようしたことがあると話していた。行政からの一方的情報氾濫に物申す、市民サイドの正確な情報発信を始動することで、次に続く人づくりにもつながるんじゃないかな？

◆エコセメント化施設は、なぜ三多摩ゴミ処分場で稼働となったのか？

多摩市民の発言に驚いた。「焼却灰を処分場に運ぶにはエコセメントを混ぜて飛ばないようしていると職員に聞いた」。エコセメントの使い道がないからわざわざ買ったエコセメントを焼却灰に混ぜて、またわざわざ処分場に戻しているってこと？エコセメント訴訟を担当したI弁護士が「当時、ゴミが努力して減ってきていた状況でエコセメント事業は必要だったのか。処分場延命のためならば矛盾する」と発言。Hさんは「青梅市の梅のプラムポックスウィルス蔓延も植物の免疫が弱ったせいではないか。エコセメント施設（から出る有害物質）が原因ではないか？」と発言。エコセメント裁判は終わったが、エコセメント問題は何一つ解決していない。